

# 集

俳句フォーラム

2005年7月 第16号

ヨークカルチャー新潟句会

序章

大平未知子

目つむりて神の子となり初詣  
初雪の結晶ポケットに入れもして  
一月の鮮度を如何に保つべき  
梅開花序章ゆるりと始まりぬ  
らうらうと唄ふさくらや春立ちぬ

祈り

阿部恵美子

羽ばたけと祈りをこめて初詣  
ドーンと積り屋根も重かる雪布団  
梅林や目と目を見詰め語りかけ  
気取っても裾を捲られ春嵐  
音もなく地に入り込む春の雨

風花

大野禮子

初詣薄日射す日の清々し  
初硯色紙に小さな手形押し  
たけくらべまた読みかえず一葉忌  
梅林見下ろし人声を聴く  
風花や点描画となる街景色

冬銀河

梅田知子

結い上げし黒髪眩し初詣  
このままでいくしかないか冬銀河  
白梅の白の世界に凜として  
珈琲の香に包まれて日脚伸び  
涅槃西風花に埋まりて旅立てり

冬籠り

大桃美枝子

初詣家族のふえて清しかり  
結いたての髪に一枝初鏡  
籠りして大根ばかりを煮ておりし  
今日ひと日無為に過して根深汁  
雲切れの冬陽煌く日本海

春の雲

小林時夫

大年の鐘が響きて初詣  
西の文字酒壺なりと辞書にあり  
雪起し真夜中の玻璃びりびりと  
春の雲鯉浮きあがりくずれける  
落椿藪より抜けて華やげる

早春あれこれ

下越逸子

病む夫を見舞ひて帰り初詣  
受験子の願ふ姿を見守りて  
春キヤベツ甘くやさしく味噌炒め  
遠方へ文認めし紅椿  
はるの雪真綿のやうにふんわりと

春の昼

外山令子

小さき手のぬくもり握り初詣  
冬薔薇笛吹きケトル鳴ってをり  
白梅の幹黒々と日に立ちぬ  
春の昼いつしか雲に乗ってをり  
春雨や口の重たき友とぬて

早春賦

中川みよ子

春近し空洞ありし老櫛  
冴返る梅花ひたすらふくらみて  
軽やかな空気ゆるみし春の街  
しつとりとけむる街並み春半ば  
霞立ち揺らぐ灯火道標

ささやかな願い

中野熙子

年々に願そぎ落とし初詣  
若き日のぽつと現わる賀状あり  
華やぐ日きつと来るはず梅古木  
春めきて忘れし球根青芽吹く  
バス遅し名のみ春風頬を刺し

無音の世界

長谷川幸子

雪の朝音みなのもんで街静か  
雪達磨一夜のまぼろし山となる  
雪下し空から声の落ちてきて  
飛行機の姿のみこむ冬の雲  
日の光集めて細る氷柱かな

シャボン玉 林 生子

雪嶺を遠く眺めて春を待つ  
冬籠り春待つ心募るのみ  
雲雀鳴く春の野を待つこの日頃  
浮雲に届けとばかりシャボン玉  
おぼろ夜や菜の花畑に陽が落ちて

薄氷 樋口龍一郎

歩み出す真白き道の初詣  
少年の熱き唇息白し  
熱爛や聞き役となる人と居て  
薄氷の光となりて動きけり  
こはれたる音のやさしきしゃぼん玉

三月の雨 堀川喜代子

ひと抱えほどの落日冬木立  
道の辺の雀四温の陽をあさり  
早春の月に被せたき薄衣  
まだ薄き春色雲の流れにも  
三月の明るき雨や交差点

うららかや 巻 良夫

初詣雲の裂け目の星ひとつ  
梅荅む日嗣の御子の誕生日  
徒長枝を剪りに凍み雪渡り行く  
うららかや「おおい雲よ」と呼んでみる  
白鳥の啼きかわしゆき帰路ならず

卒業歌 吉田八英子

ふつくらの娘の手に譲る恋歌留多  
若菜摘む腰手拭ひの白さかな  
楫や猫の首紐真新し  
ちぎれては別れゆく雲卒業歌  
長靴を洗ふ橋守弥生尽

芽吹き季節 米岡幸子

初詣帰途のいつもの喫茶店  
とりどりに春立つ色の金米糖  
古時計止って動いて春隣  
雪解川雲ゆっくりと流しけり  
ものの芽の勢い母の弱りけり

## 御苑句会

心字池

松永ハツエ

冬翡翠空をはばたき心字池  
また少し辛夷の蕾通学路  
滝壺の深きは見えず椿咲く  
春の猫とたん屋根より出入りす  
老いて今あれやこれやと雪柳

芽山椒

橘高絹子

芽吹かんと囁きあうや溪の音  
轉りや喉の痛みが癒りおり  
深呼吸して梅の香をとじこめる  
芽山椒母の得意な味噌和えに  
花の屑水のせせらぐ方に寄る

扉を敲く

若泉真樹

人の去る気配は哀し春立つ日  
黒潮の潮目の見える二月尽  
鬱の扉を敲きし風や竹の秋  
自家用の春の鯛を雑多干し  
古伊万里の壺の青から黄沙降る

青竹

東紀子

手から手へ抱きとる孫や流行風邪  
幼き日の息子ら懐かしや福は内  
陽ははだら青竹太く伸びており  
春寒し待つことばかり多き日々  
濠を覆う桜の下に櫂の音

鎖骨

佐藤仁

薄氷や深きに歪んだ鯉の居て  
プリズムの鍍を射るや雪解光  
終ただ青くありたし棘纏い  
姿見に鎖骨の白し春三日月  
「ポアゾン」の香で大人びし春女苑

残る鴨

福山至遊

賀状の字乱れて記憶の恩師若し  
仕事始めは待つことアルバム繰ってみる  
寝かせおくもろみの赤し冬椿  
膝がしらの痛む日一羽の残る鴨  
「災」と窓に書きみて暮の雪

凧

遠塚青嵐

老木のポプラを装う蔦紅葉  
池の畔の淑氣白鷺一羽佇つ  
松の内尼僧が二人山手線  
友納骨寒風に唯立ち尽くす  
ポプラの樹凧を捉えて居丈高

関口芭蕉庵三二吟行録

福山至遊

御苑句会の発足は四年前の桜の下での吟行でした。  
四月の最初の土曜日だったかと思ひます。もう花吹雪  
が美しい、散り際の桜でしたが、少し花冷えが続いて、

我々の会の発足を待っていてくれたかのようでした。  
その後第三土曜日が定例の句会の日になったので、桜  
とは縁の無い会になってしまっていました。

そこで三月の最終土曜日に開く葦の会に合わせれば、  
運が良ければ桜にも会えるかと思ひ、今年はその合  
流することを計画しました。葦の会の句会は午後なの  
で、その前にちよつとした吟行をやるつという企画で  
した。コトスは地下鉄江戸川橋に集合して、桜古木の  
並木のある神田川べりを歩き、関口芭蕉庵を訪れ、残  
つた時間は椿山荘の庭園を散策しようというものでし  
た。時間は約二時間しかありませんから、文字通り三  
二吟行です。

集まつたのは先生の他に、紀子さん、絹子さん、八  
ツエさん、葦の会から太郎さん、少し遅れて両方の句  
会に参加の青嵐さん、それに私の七人でした。

当日は天候には恵まれましたが、それまでの気候か  
ら開花は諦めていました。それでも一輪くらいは見る  
ことができるかと期待していましたが、甘い期待に過  
ぎたようです。蕾は固く、多少色づいている程度でし  
た。でも桜がなければ無いで、他に見るものは色々  
あります。

穢れなき儀式さくらはまた蕾

真樹

先ず染井吉野が駄目ならと緋寒桜が神田川の遊歩道

への入口の近くに咲いていました。雪柳、連翹、山菜、土佐水木等の花々も目を楽しませてくれました。その他に小さな池の中には無数のオタマジャクシが不器用そつに泳いでいます。蝶も今年初めて見ました。モンシロチョウです。初蝶です。

蝶睦みバグ犬いつものしゃくれ顔 太郎

犬に興味のない私には、バグ犬というのが判りませんでした。後で会報を読むと、かなりアンバランスな姿態を見せる犬のようです。

山菜莢咲く話上手の人と居て 太郎

老いて今あれやこれやと雪柳 八ツ工

蝌蚪群れて散つて聞き耳立てている 至遊

関口芭蕉庵は芭蕉がまだ若い頃、この神田上水の工事に関係していて、現場監督をやっていたということから作られたものです。広くはありませんが、変化に富んだ日本の庭園らしく、ただきれいに刈り込んだりしないで、自然を残した風情にしてあり、まるで深山に踏み込んだような錯覚を起させます。ここには芭蕉の真筆と銘打った「古池や蛙とびこむ水のを」との小さな句碑があります。「古池」の「ふ」の字が「婦」になっていたことを妙に覚えています。

ぺんぺん草吾も春よと手を揚げ 青嵐

庵の中の高い場所に行くと、孟宗竹の林があつたり

して、風景が少し違ってきました。こんな狭い場所で、これだけ色々の顔を見せてくれるのも、設計者の知恵と愛着が感じられます。

まだら陽に青竹太く伸びており 紀子

やはり時間が出来たので、椿山荘の庭園に入りました。お茶を飲むまでの時間はありませんので、先に挙げた花々に加えて、椿、侘助等に満ちた庭園を散策しました。若冲作と説明のある羅漢像が味のある顔つきをしていました。自然に皆の足は遅くなり、引率者としてははらはらしたものです。

初蝶や石の羅漢の眉ゆるむ 真樹

春昼や顔の艶増す撫で地蔵 太郎

それぞれの思い留めて落椿 絹子

当日の句会では、葦の会と合同なので、吟行句には限定しませんでした。実は私は吟行句は一句も出しませんでした。挿入した句は別の句会に出した句です。青嵐さんの句も吟行句ではないかも知れませんが、その雰囲気もあるので、ここに収録しました。時間がなかったにも係らず、見てきたばかりの感動を詠んだ句は、葦の会で結構人気を集めました。特に先生の「初蝶や」の句は最高点で、採らなかつた人が「何故？」と聞かれる始末でした。こんな訳で一応成功！と思っています。またこのような交流句会を企画したいものです。

## 季語周遊

若泉真樹

服部土芳著の『三冊子』の中に、次のような一節がある。

塩鯛の歯くきは寒し魚の棚 芭蕉

此句、師の曰、「心遣わずと句に成もの、自贗にたらず」と也。「鎌倉を生て出けんはつ鱈」というこそ、心の骨折、人のしらぬ所也。「またいわく、「猿の歯白し峰の月」といづは其角也。塩鯛の歯くきは我老吟也。下を、魚の棚」とただ言たるも自句也」といへり。

一年程前、この一節の解釈について問い合わせがあり、つぎのように直訳した。

「塩鯛の歯くきは寒し魚の棚」この句に対して、師は次のようにいわれた。

「この句はふと思ひ出したことが句になったもので、

自分でほめるほど値打ちのあるものではない」と。

そして「鎌倉を生て出けんはつ鱈」という句こそ随分骨を折った句であるが、その骨折りは人々には理解されていないのである」といわれた。

師はまた、「声かれて猿の歯白し峰の月」といつような珍奇な題材を捉えることは、其角の風である。塩鯛の歯くき、のごとくありふれた題材の中に詩境を求めるのは、私の句作の特長である。下五の魚の棚と俗語を用いたのも私の句作の行き方である」。

このときの訳は、いくつか腑に落ちないことを抱えつつも、表面的な訳と感想を述べるに留めたが、今回はそのとき腑に落ちなかったことを、再考し想像を膨らませてみたい。

土芳が、この項で書きとめたのは、芭蕉の句作の苦心と世評との関係、其角と自分との句風の相違について、芭蕉自身が語ったことである。

「塩鯛の歯くきは寒し魚の棚」は、魚屋の店先には、生魚の姿もなく、塩鯛がわずかに並べられている。その白い歯茎をむき出しにしている様は、いかにも寒げであることよ、といった句意である。

この句は、其角が自身の俳集『句兄弟』のなかの「声



かれて猿の齒白し峰の月」に対して兄弟句をと求めたのに芭蕉が応じた句である。

其角は、芭蕉が句兄弟として「塩鯛の」の句を示したことに對して、衰零の形にたとえなして、老の果て年の暮れとも置きぬべき五文字を、魚の店(棚)と置かれたるに、活語の妙をしれり。其、幽深玄遠に達せる所、余はなぞらへてしるべし」と賞賛している。

しかし、芭蕉はこの句は「心遣わず」に詠んだと土芳に伝えていのである。「心遣わず」とは、ふと思ひ出した、あるいは心を遣わず、と言ったところの意である。

其角の「声かれて猿の齒白し峰の月」を見せられて、あまり勞せず、ふつと句が出来た。そのふつと出来た句にもかかわらず、評判になったことに芭蕉は「……ほめるほどの値打ちのあるものではない……」と謙辞しているのである。

そして、その反対に大変苦心して創作した句だが、余り褒められず、人に判って貰えなかった句の例句として、「鎌倉を生て出けんはつ鯉」をあげている。

「この句が実は今回の本題であるが、「塩鯛の」の句についてもうすこし、調べたことを述べたい。

其角の「声かれて猿の齒白し峰の月」と「塩鯛の齒くきは寒し魚の棚」の句風の相違について、芭蕉は……

猿の齒白し、など珍奇な題材を捉えるのは其角の風である。塩鯛の齒くき、などごくありふれた題材の中に詩境を求めるのが私の句つくりの特長……と具体的に述べていることは、現代の作句でも注目すべき事柄である。

其角は自句の「猿の齒白し」について、自ら讃して「これこそ冬の月というべきに、山猿叫山月落と作りなせる物す……巴峽の猿によせて、峯の月とは申したるなり……(少夏略)」といい、李白の詩文を余情に句わせんとする意図を表明している。

其角はこつした手の込んだ人を驚かすよつな知巧を得意とした。それが彼の句を多彩にしたが、一面難解にもしたようである。

これに対して、芭蕉はこの頃すでに漢詩の本歌採りから脱却し、取材の珍奇を求めることなく、身边卑近なところを探って高い詩情を見出すことに重心を置いた句境を目指していたと言つことである。

しかし、芭蕉は、なぜ「塩鯛の」のすらすらと詠んだ句との引き合いに、「鎌倉を生て出けんはつ鯉」の句を苦心して詠んだ句として提示したのだろうか。

創作の苦心の人に知られない例としてなら、「心の味わいをいとらんと、数日腸をしぼる」と自ら骨折れたる句であると言っている。

から鮭も空也の瘠も寒の内 芭蕉

など他にも例句があるだろうと思われる。土芳の言葉の書き取りが少ないので分かりにくい。苦心したのは「季語」と「名所」を詠み込むことの、骨折りが言いたかったのだろう。

さて、「鎌倉を生て出けんはつ鯉」の句であるが、当時、江戸っ子に鎌倉で捕れた初鯉がもてはやされていたといふ。

江戸の町なかを、天秤棒を担ぎ売り歩く初鯉の新鮮さの例えとして、鎌倉を出るときはぴちぴちと生きていたことだろう初鯉は、という句意とされている。

余談であるが、徒然草にも「鎌倉の海に鯉といふ魚は、かの境ひにはさつなきものにて」とある。江戸時代、鎌倉は鯉の名産地として知られていたらしい。

現代でも、三浦三崎や横須賀の漁港では、鯉が捕れるそうだが、鎌倉で鯉が捕れたとは、想像しにくい。元禄の頃、鎌倉は江戸に住む人の食料供給のための漁村の一つだったのだろうか。

今は一時間足りずで、東京と鎌倉は行き来できるが、流通性、利便性の乏しい時代のことであるから、「鎌倉

を生きて出でけん」は新鮮な鯉が威勢良く売れていく気分を表そうとしたのだと解釈されて、納得されてもいたのはいた仕方なかったのだろう。

しかし、そう単純に解釈されたことを否定はしなかったが、芭蕉は不満だったのではない。土芳には名所と季語を一句に詠み込む創作の苦心は、その句を読む側（受け取る側）の解釈や評とは無関係であり、世評と作者の苦心が必ずしも一致しないものであると述べるに留めてはいる。それでも一言、芭蕉はこの句は名所を入れることに苦心した、と言わざるを得なかった。

読み手は読み手の身の丈でしか解釈評価できない。それは芭蕉の時代も同じだったであろう。一般的な解釈のほかに、芭蕉が苦心したキーワード「生きて出でけん」は「重構造」になっているのではないか。

余談になるが、「名所を用いる事たやすからず」について、各務支考著の『葛の松原』にも、

五月雨のかくれぬ物や塾田のはし 芭蕉

梅若菜鞠子の宿のところろ汁

〃

とともに「鎌倉を生きて出でけん」を掲げ、「詩歌に

名所を用いる事たやすからず」と芭蕉が言ったとある。しかし、「詩歌に名所を用いる事たやすからず」は確かであるが、「五月雨」「梅若菜」の句との列挙は的を得ていないようにも思う。なぜなら、「梅若菜」の句に對して、『三冊子』のなかでは、

「この句たくみて云える句にあらず、ふといひて宜しと後に知りたる句。かくのごとくの句はまたせんとはいいかたし」

と言っている。つまり作るつと工夫をこらして詠んだ句ではないのである。思わず口について出た即興の句なのだ。しかし、即興の句ではあつても、後で芭蕉は「梅若菜」の句について、われながらよく出来たと氣づいたと言っている。

また、「この様な句は二度と作るつとしてもつくれるものではない」ともいつているが、名所を用いる事たやすからずと、苦心した句とは言っていないのである。芭蕉が苦心し、骨折つたのは、「鎌倉」という名所を詠みこむことであつた。

勿論、初鱈が捕れることは名所とは言わない。名所といふからには歴史的な有形無形の遺産があり、詠み手と読み手がそれらを共有することが必要である。固

有名詞を共有すると言つて点で、

辛崎の松は花より臙にて

芭蕉

行く春を近江の人と惜しみけり

芭蕉

などについて、近江の地は古人もこの国で春を愛惜した、と芭蕉自ら去采に語つており、聖徳太子や天智天皇の頃さえも視野に入れている。

鎌倉は、芭蕉の生きた元祿から溯ること五百年前、日本最初の武家政権が源頼朝によつて樹立された古跡である。

源氏による鎌倉幕府は、頼朝から、三代將軍実朝が暗殺されるまでの三十二年しかもたなかつたが、鎌倉幕府は北条氏の執権政治で百五十二年続いた。

今、鎌倉を代表する名所は、鎌倉八幡宮や当時の鎌倉五山のうちの建長寺、円覚寺といった名刹がある。

江戸時代は駆け込み寺として、尼寺の東慶寺も名刹であつた。

しかしそれらは、鎌倉という言葉で代表はされない。鎌倉は、鎌倉殿と呼ばれた源頼朝を頂点とする当時の武家集団のことである。

鎌倉に幕府を定めた初期は、朝廷と鎌倉の武士集団の二重政権であつた。また幼い鎌倉幕府の動静情報が京の朝廷に漏れることを極端に嫌つた頼朝は、鎌倉の

出入りに厳しかったと言つ。特に鎌倉を出るものに容赦がなかったとも言つ。鎌倉に入ったものは生きて出られない。そんな言い伝えが、芭蕉の頃まで伝わっていたのではないだろうか。

ここからは、すべて仮説、推測である。芭蕉は物言えぬ敗者に哀れみを抱いていたのだらう。もしかして、判官びいきなのかも知れない。そんな芭蕉だから、鎌倉でとれた、初鰹の振り売りの声をきいて、鎌倉殿にまつわることどもが浮かんで来たのではないか。

「奥の細道」 平泉その一 には、

「三代の栄華も一睡のうち過ぎて、今は廢墟を残すのみの大門……」にはじまり、「……さて、選りすぐった義臣たちがこの高館に籠り、その華々しい功名もただ一時のことで、今は茫茫とした草原となつた。国破れて山河あり、城春にして草青みたり 杜甫」とばかり、笠を敷いて腰をおろしたまま、時の移るのも忘れて涙をおとしていた。

夏草や兵どもが夢の跡

芭蕉

とある。藤原三代のことではあるが、抜粋した部分は、多分に義経を意識しての文章と思われる。「鎌倉を

生て出けん」には、頼朝義経の兄弟の相克も遠景にあつたのでは、と推測する。

句は一人歩きする。捕れたての新鮮な鰹 今まで生きていたはつ鰹を詠つたという、表向きの意味が容認される。しかしそれは、作者の意図しなかつた解釈であつたかもしれない。だから芭蕉は土芳に「苦心した」とのみつぶやいたのである。

句は拡大解釈してはいけないという人もある。そこまでの解釈はペダンチックという人もいるだらう。

しかし、「鎌倉を生て出けんはつ鰹」の句意を「鎌倉を出るときはびちびちと生きていた。それほど新鮮な鰹だ」と、詠つのに芭蕉ほどの人が「詩歌に名所を用いる事たやすからず」と心の骨折をするだらうか。芭蕉はこの句に「重構造の意をこめたのかもしれない。謎であるがこんな空想も現代だからできる。

芭蕉の友人に山口素堂と言つ人がいる。ともに北村季吟のところで学んだことがあり、俳諧の兄弟子だったのでと思つ人である。この人の句に

目には青葉山ほととぎすはつ松魚

素堂

がある。この句、鎌倉の鰹を詠んだのではないかと

言われているが、今も初鯉と言え、俳句を語らない人でも知っている話題の句である。

この句、現在の季語感覚では「青葉」「ほととぎす」「はつ松魚」とすべてが季語である。素堂がわざと洒落で作ったのかもしれないが、季語が三つも入っていることを忘れてしまつほど親しみやすい句である。

この句の季は「はつ松魚」であるとされるが、すべてが季語であっても、これほど堂々としていると、何とも楽しくなってくる。ただし、やたらと真似はしないほうがよさそうである。

鎌倉を生て出けんはつ鯉  
目には青葉山ほととぎすはつ松魚

芭蕉

素堂

同じ時代に同じ場所の「はつ鯉」の季から、古跡に触発される芭蕉、鎌倉の青葉や山ほととぎすに思いを馳せる素堂、十七文字の俳句はそれぞれ別な顔を持って広がっていくから不思議な詩だと思う。

## 俳句フォーラム「集」のご案内

### 目的

俳句フォーラム「集」は、俳句を通して、広く句会の相互交流を旨とし、句会単位の作品及びエッセイ等の発表の場とする。

### 内容

会員の作品は一人五句掲載（題名・氏名・俳号をいれる）。句会翁報（二か月分）や句会の紹介、その他、特別作品、エッセイ等の掲載を行う。掲載は誰でも自由に行うことができる。ただし、希望者は句会の世話役・幹事を通じ、事務局に相談のこと。

### 発表形式 参加費用

四季報（一・四・七・十月）とする。  
一人最低一冊購入。単価八百円。  
費用は各句会の世話役・幹事がとりまとめ、事務局宛送金を原則とする。

### 募 集

句会を楽しんでおられる方々で、新しく「集」に参加してくださるグループを募集いたしております。皆様のお知り合いで句会をなさっておられる方に、ぜひ呼びかけてください。

新しい句会、お仲間のご参加をお待ちいたします